

表紙絵・挿絵：すおはち
挿絵：blew
文：白金桜花
R18

うちの陽炎さん

アカシヤエフエクト観測委員会

うちの陽炎さん

文…白金桜花 画…すおはち、b l e w

目次

第一話	03P
第二話	35P
第三話	89P
第四話	150P

第一話 陽炎さんと提督が出会ってえっちするだけの話

1

九龍鎮守府は香港にある海軍の鎮守府である。

深海棲艦に対するアジア方面の拠点の一つであり、そんな鎮守府に提督として配属された彼、御冷多聞提督は最近は上の空だった。

仕事自体は普通にやるものの、比較的状况が安定してる時はたまに溜息をつき、どこかぼーっと遠くを見る事が多い、そんな状態だ。

「今日の仕事はこれぐらいね……あんだ、大丈夫？」

そんな提督に対して、秘書艦の叢雲は心配そうな眼で見る。

「大丈夫、俺は大丈夫だから」

叢雲に対し、笑顔を造りながら返す提督。湯呑に注がれた冷えた麦茶を、ごく

りと飲む。

提督は数週間前に配属されたある艦娘の事をよく考えていた。

赤毛のツインテールに紫色の瞳、すらりとした、けれども幼さのある輪郭の少女。

陽炎型駆逐艦一番艦の少女、陽炎の姿が、執務室に来た時の笑顔が忘れられなかった。

「……陽炎の事？」

「え？」

叢雲もそれを察していた、提督が、彼女が気になる事は前から察してたからだ。「いやだって、あんたが提督になったの、あの子が艦娘になったからじゃない、違うの？」

叢雲の言葉、提督はその役割が不十分な程に若い、何故提督になれたかという

と、海軍が深海棲艦との戦争で大打撃を受け、苦し紛れに「適性の高い人間を徴用し、提督として参戦させる」と言う事を行ってる。

御冷提督もその一人で、彼が提督になったのは、叢雲の言う通り、陽炎の素体になった少女……提督が高等部の頃に、叢雲の素体になった少女と仲良くしてた彼女に、どこか恋心みたいなものを抱いてた。

だから彼女が艦娘になった時、喪失感のようなものを、自分の手の届かない所に行ったと覚えてしまった感じがあって、そして提督になれるチャンスが来た時、無意識に彼女のことを意識して、それに縋ったのである。

叢雲も提督とは付き合いが長い、だから陽炎の前だと微妙にぎこちないのは理解してた。

「違うよ、少し今後の遠征計画について考えてただけさ」
けども提督はそれを表に出さず、嘘をつく。

流石に艦娘を制御する立場なのに、駆逐艦ひとりに心を重く入れ込んだら、いけないと考えてたからだ。

「そう、あ、話は変わるけど、今度買い物連れてってくれる？上司じゃなくて友達としてお願い、いいかしら？」

素直じゃない、と思いつながら叢雲は提督にまた冷たい麦茶を入れながら、笑顔で問う。

「ああ、問題ないよ」

その麦茶を飲みながら、提督は返した。

2

やばい、はめられた。

そう思いながら提督は待ち合わせ場所の香港のある喫茶店に居る。

その向かいの席に居るのは叢雲でなく、駆逐艦陽炎だ。

オフの日なのでパーカーにジーンズ姿という格好なのだが、ジーンズに包まれた下半身は少し細めのスレンダーな体つきを、強調してるように見え、パーカーの首元から見える素肌と鎖骨が、どこか官能的ではあった。

「えっと、先輩に代わりに行ってこいって言われたんだけど……御冷さんでいい？それとも司令？」

困惑しながら、陽炎は提督に問う。

先輩である叢雲に

「好きな方でいいよ」

名前で呼んでほしいと提督は考えたが、提督は陽炎の自由意志に任せることにする。

「じゃ……司令でいいわね？」

流石に私用で呼ばれたのだから提督と呼ぶのはおかしい、けども御冷さんと呼ぶのもしつくりこない、そんな事を考えながら、陽炎は言った。

「問題ないよ」

少し残念だと思いながら提督が返し、そして二人で喫茶店でコーヒーを飲んだ後、服屋に出かける。

「どう、似合ってるかしら？」

何個か服を選び、試着して、提督に陽炎は聞く。

試着してるのはフリルのついたクリーム色のワンピースだ、細く、きれいな陽炎の手足が、強調されるような気が提督はした。

「俺は悪くはないと思うけど、基本こういうのは女ウケするものを選ぶもんじゃないかな」

「それもそうだけど、ちょっと別方向から試してみたい所もあるじゃない」

陽炎は返す。

よくわからないけど、頼られるのは悪くないと提督は感じ、まんざらではない気分になった。

その後提督のほうも陽炎に服を選んでもらったりして、服屋から出て買い物が続ける。

提督も欲しい本があったので古本屋に寄って、適当に本を漁って紙袋いっぱいの本を買う提督に陽炎がちよっと驚いたりした。

「本、好きなの？」

「時間を選ばず読めるからね」

提督は笑って返す、読書ならTVやラジオと違って電気類がいらず、時間を選ばずじっくり楽しめるから提督は好きだったりする。

同様の理由で映画も好きなのだが、映画は2時間も時間を拘束されるため、提

督になってからは月一で映画館に行くぐらいであまり見ていない。

「そっか……司令ってそういうえば、年中無休よね」

陽炎は気づく、今ここで休暇をとって遊んでいられるのは戦況が悪くないからだ。

もし悪くなったり、いきなり深海棲艦がやってくればすぐにこの買い物もやめて艦娘を編成、討伐しなければならない。

「仕方がないよ、金払いは良いし、君みたいに前線に出るわけじゃないからね」
提督は返しながら、結局の所、女の子に戦いをさせ、自分は後ろに居るだけという状況のもどかしさを認識するのだった。

そうして夕暮れになって適当な飯屋で食事を取り、帰路につく。

どこかきこちないけど、少しは距離を近づけただろうか、提督は考える。

「あ……そう言えば御冷さんって、私の学校の先輩よね？」

夕暮れの中、道路を歩く提督の背中を見ながら、陽炎は気づいた。

自分の学校時代の先輩の叢雲の同級生で、提督に似た感じの男の人の姿を、ふと思い出したからだ。

「そうだよ、気づかなかった、かな、あんまり顔は合わせてなかったし」

「ごめん、確か先輩と友達だった人よね？」

「そうだよ、叢雲とは学生の頃からの友達、と言っても、前とは雰囲気が変わったけどもね」

気付いてくれたと思うと、提督の表情が和らぐ。

確かに最近の叢雲は少し様子は変だった、どう違うかと言われると違和感があるが、どこか前よりも落ち着いていて、自分に対して親身に接して来てるのだ。

近接戦用の得物も何故かスパイクロッドを愛用してたのが刀に変わっていて、何か、似ているけど別人と言う感覚がどこかに纏わりついている。

「あ、司令も思った？」

「うん、何かこう、凄味が増した感じだよね」

「そうそう、この前駆逐隊で哨戒に出て戦艦と出くわしたときとか懷に潜り込んで魚雷全部叩き込んだのはヤバかったわ……完全に戦艦を狩ってたのよあの人」

「あー、あの時援軍あるまで持ちこたえろって言ったんだけど、その前に叢雲が撃破した時は俺も流石にびっくりしたかな」

「やっぱり？」

「そうして学校の頃を切欠に、互いに会話が弾みながら、鎮守府まで帰宅していく。」

そうして提督と陽炎は一緒に買い物に行った兼以来、良く一緒に居るようになった。

昼食の時にあれば食堂で叢雲と一緒に顔を合わせ、仕事がひと段落ついた夜も何だかんだで、ラウンジで遊ぶような仲にはなる。

その日も提督と陽炎は一緒にチェスをして遊んでいた。

ラウンジには人気がない、結構な長期戦になったので、大体私室に戻ったのだ。

「はい、チェックメイト。残念だったわね」

「また負けか……何敗だったかな」

チェス盤を見ながら、提督は考える。

陽炎はチェスが得意だ、天才的と言ってもいいぐらいのセンスがあつて、鎮守府内でよく賭けチェスで荒稼ぎをする時もある。

提督とつるむようになってからは賭けチェスはあまりやらず、賭けチェス仲間

の加古に茶化された時陽炎は「今忙しいのよ」と返したのを、提督は少し印象に残ってる。

「全敗よ？私はチェスだけは得意だから、当然だけでも」

「手加減はしないでいいからね、手加減してこれだと、俺もプライド傷つくし」
「大丈夫大丈夫、何時も全力でやってるわよもー」

笑顔で陽炎は語る、正直負けるのは悔しいが、嬉しそうな陽炎の笑顔が見れるので、敗北を代価に彼女を味わえるのなら、悪くないなんて提督は思ってしまった。

「ならよかった、次こそは勝ってみせるよ」

「私も負けないわよ？あ、でも司令権限の持久戦はやめてよ？昔のアメリカのチェスのチャンピオンとか、複数のソビエトのチェスチャンプ相手の連戦で疲弊して手も足も出なかったとかあったのよ？」

チェスの知識を語るネタとして陽炎は冗談を飛ばす。

「そんな事をやるのなら」

提督も冗談として受け止め、そしてテーブル越しに向き合う陽炎の唇に顔を近づける。

そして、そっと彼女の柔らかい唇に口付けをした。

「ん……」

提督のキスに、陽炎も受け止め、特に抵抗しなかった。

その事に提督は上手く行った、と実感を得ながら、そっと唇を離してく。

恋愛とは格闘術に似てる、最初はある程度の距離の関係から、間合いを詰め寄り、そして決定打を打つ格闘戦。

冗談を言い合う間柄、割と体を触りあう、距離感としてはだんだんと近づいていることを認識しての一手、博打だった。

「こうやってキスを一晩中して、疲れさせてから勝利を取りたいよ」
キスが終わって、惚けた陽炎に対し、提督は笑みを浮かべる。

惚けた顔もまた可愛くて、もう一度キスをしてみたいと、提督は考えた。

「……今のは冗談？」

ぼうつとした顔で、陽炎は言う。

自分の唇を指でなぞる、提督とのキス、いきなりされたけど不快感はなく、むしろ気分が高揚してた。

「告白自体は冗談じゃないよ、これからも付き合ってくれないかな？」

真正面から言うのと少し恥ずかしいな、と思いながら、提督は言う。

「そう、なら……」

陽炎もまた、テーブルから身を乗り出し、提督にキスをする。

柔らかな唇、揺れる彼女の髪の質感が、提督の顔を刺激し、そっと、唇を離す。

「……これで、良いかしら？」

キスが終わったら、急に恥ずかしくなってしまうて顔を真っ赤にして紫色の目を逸らしながら、陽炎は提督に返答の告白をした。

4

なんて事だ。

そう提督は戦術指揮用の艦娘輸送揚陸艦の戦闘指揮所にて頭を抱える。

電探の情報や艦隊艦娘とリンクした視界データ等の情報が壁中のディスプレイに表示されており、そこで示す情報は以下の通りである。

・叢雲、陽炎、黒潮、川内、大鳳、瑞鶴で構成された空母機動艦隊が敵艦隊にと交戦。

・敵は重巡4、戦艦2と重装備であるものの、資源採掘用の人工島に陣取っていたため空母が強襲し、そこで混乱した所で懷に回り込んだ駆逐艦達の魚雷で難なく撃破。

・しかし敵の撤退する大規模輸送船から駆逐級が24隻発艦し、その特攻戦術に対し通常ならキルレシオ6:1程度の駆逐艦娘でも苦戦し、陽炎と川内が大破。

・大破した陽炎と川内は黒潮が確保して撤退、叢雲と空母二体の艦載機がそれまでの戦闘で残った18隻の駆逐艦と交戦、うち15隻を撃破、3隻は撤退。

・叢雲は大破しなかったものの、大鳳と瑞鶴の艦載機は搭載されたAIが上手い事機体に「馴染んだ」熟練ともいえる艦載機を敵の損失。

全体的に見れば敵の方が物量で勝る以上、決して手放しで喜べる勝利ではなかった。

特に陽炎と川内の損害は酷く、どちらも改造処理……人間の体を機械化して、人間では無く『艦娘』へと変質させる措置を取っていなければ轟沈しただろう。大破して帰ってくる陽炎は下半身と右腕を失っており、欠損部分からフレームを露出し、それでもまだ意識があったのか、悲しげな眼で見ていたのが、提督の心に残る。

だが、それでも容体が急変して大破から轟沈に処理が変わるかわからない、そ

んな瀬戸際だった。

だから提督の頭の中で後悔と、不安が頭に渦巻いてた。

「全員生存はしてますね、叢雲さんのおかげでしょうか」

後ろから声、振り向くと、前線司令官である提督と大本営との連絡を行う連絡員兼、軽巡洋艦娘の大淀がいた。

「大淀か」

「ええ、あの数をほぼ一人で何とかできましたもの。それに陽炎さんと川内さんですが、どちらも生命維持カプセルに入れた所容体は安定してましたよ、本格的な入渠はどうします？」

「もう手配してる、すぐにこの艦が鎮守府に戻ったら搬送される」

手配をしてないと思ったのか、と考えながら提督は返した。

そうして輸送揚陸艦が万が一起り得る敵の艦載機の攻撃を警戒しながらも何事もなく戻ると、すぐさま救護班が駆けつけ、陽炎と川内を入渠させた。

「お疲れ様、伏兵が居たのが厄介だったけど、今回も生き残れたわね」
船から降りた叢雲が、提督に声をかける。

「危なかったけどね、君のおかげだよ」

肝が冷えた、そう提督はつくづく思う。

「どういたしまして、私が居る限りはあの程度の相手ならどうにでも出来るわ」
叢雲はそう言って、笑顔で返した。

その後入渠が終わり、後処理を行った後、提督は私室でゆっくりとする。

色々な事があって少し疲れたので、ウィスキーを氷の詰まったグラスに注ぎ、少しづつ飲む。

陽炎の儚げな表情が、フラッシュバックする、まるで、見られたくないものを見られた感じのした、あの顔を。

「フォローしようにも、地雷かな……」

提督は考える、氣にしないで伝えようにも話題にただけで気分が悪くなり、感情的になるものは時として存在する。

改造は志願して行うものだ、そして陽炎はこの鎮守府に配属される前に、改造申請を行った。

現在の関係になる前、恋も何もかも捨てて戦うと決意した時の代物、けども決意は揺らぎ、砕けてしまえば後は後悔へと変わる。

互いに知ってながら、見ようとしてなかったが、戦場故に、曝け出す事もあるのかと、提督は考えていた。

そんな中、ノックの音がした。

「誰だい」

そう提督は言うのと、無言でドアが開かれる。

開かれたドアの先に居たのは、陽炎だった。

「陽炎か」

提督が言うのと、彼女はベッドの上に座る。

そして無言で、提督の方を見つめる。

「ねえ、司令……考えたんだけどさ、私の体、やっぱり気持ち悪いわよね？」

寂しげな表情で、提督の見立てた通りの反応を、彼女は口に出す。

やっぱりか、なら、答は簡単だ。

そう思いながら提督は椅子から立ち上がり、ベッドの上の陽炎に近づき、そして彼女の両腕を掴み、押し倒した。

「……いいの？ 私の体……」

「構わない」

ベッドの上で、顔を逸らした陽炎に対し、提督の答えは、それだけだった。それだけで、今は十分だった。

提督は彼女の首筋に口づけをした後、唇を合せ、舌を流し込む。

ディープキス、所謂大人の口づけをすると、陽炎は成すがままに、それを受け入れる。

舌を絡め、上顎を刺激され、むず痒い気分になりながら、そのまま唇を離す。

「ねえ……しれえ……このまま……するの？」

吐息を荒げながら、キスをされて興奮し、惚けた陽炎が問い掛ける。

その問い掛けに対し、当然と返しながら、彼女の服を脱がして行く。

脱がした裸体は、それこそよく見ないと義体だと解らないぐらいに人間そっくりで、スレンダーな身体付きではあるものの下半身、尻肉から太腿にかけての肉

付きは悪くなく、胸も小ぶりだけど、確りあり、鎖骨から顎にかけてのラインも芸術的ではあった。

そして下半身には確りと女性器が存在する、これは改造された艦娘の義体は、改造前の体をベースにしたフルオーダーの義体だからであり、全身をスキャンしてから造られてる証左でもある。

提督は次は右胸に口づけをして、乳首を舌で舐めて転がす、胸の刺激、恋人が行う刺激を陽炎は味わいながら、びくり、と体を震わせる。

「んっ……あっ……」

そのまま提督は右手の指を淫裂に添え、撫でた後、陰核の部分を捏ね繰り回す。
「ひゃっ!?! だ、だめ……し、しれえっ……」

胸と下半身の刺激に、思わず腰をくねらせ足を閉じようとするけども、足を閉じた隙間から指は陰核を刺激し続け、官能を与えていく。

快楽を拒絶するように陽炎が首を振ると、ツインテールがゆらゆらと揺れ、次第に陰裂が濡れ出す。

「あうっ、と、とめっ……はあんっ」

右胸を舐め終ると左胸への口での愛撫が始まり、急な左胸の刺激に、軽い絶頂を覚える。

けれども愛撫は止まらない、陰核を捏ねる指が淫裂をなぞり始めると、くちゅり、と湿った音が流れた。

「う、ううっ……」

呻くような喘ぎ声、提督に一方的に、体を委ね、丹念に愛撫されている実感に、陽炎は浸る。

無毛の淫裂をなぞられ、湿った音が流れる度に、恥ずかしさに身を震わせるが、いつしか閉じていた足は開かれ、提督の愛撫を一方的に受け入れる状況となって

いた。

「はあ……あんっ……はあっ……」

淫裂に指が入り、入口のあたりで抽挿されて陽炎は快楽を受け止める。通常、処女なら痛がるのだが、陽炎の義体は性行為を純粋な快楽行為、ユーザーの息抜きと理解してる為か、苦痛を彼女に送信しない。

胸への愛撫を止め、提督は陽炎と向かい合い、またキスをする。

舌を絡め合いながら、膣の入り口を抽挿する度に、彼女が震え、自分のものになつていふと言う征服感を提督が、相手の所有物として愛されふと言う倒錯した感覚を陽炎は味わう。

そうしていると提督の陰茎もどんどんと昂りを見せ、そろそろ頃合いかと思つた提督は、キスを解き、膣への愛撫も止める。

舌と指が、それぞれ唾液と愛液の糸を引かせ、今度は陽炎の腰が掴まれ、提督

の陰茎が、膣口に宛がわれた。

「あ……」

陰茎を当てられる感覚に、陽炎はこれから処女を奪われるのだと認識する。けども、柔らかい絶頂を何度も愛撫で経験した快楽に惚けきつて、構わないと認識し、こくり、と頷く。

提督はそのまま陰茎を濡れ切った膣内に押し込み、そして処女膜を貫く。

「ひっ……!」

膣内に陰茎が押し込まれる感覚に、弱い痛みと共に強い快楽が押し寄せる。そのまま提督は動くと言げ、きつく、陰茎を締め付ける膣内にゆっくり挿入していく。

「あんっ、あうっ……しれえ……んっ……」



赤らめた頬で、熱の入った表情で、紫色の美しい瞳で膣内を犯される感覚を味わいながら陽炎が喘ぎ、提督を呼ぶと、また、唇が奪われる。

ぐちゅん、ぐちゅんと抽挿する音は強まり、唇を合せながら、陽炎の膣は処女喪失の証の血を薄める程に、愛液を溢れさせた。

征服してる、犯してる、抱いている。

征服されてる、犯されてる、抱かれてる。

提督と陽炎は、互いにそう受け止めながら、互いの与える快楽に浸って行く。抽挿の速度が強まって行き、陽炎もまた、腰をくねらせ快楽を積極的に得ようとする。

提督の陰茎がGスポットを刺激する度に、陽炎は強い快楽を受ける、処女喪失だというのに、快楽に溺れ、でも、喘ぎ声は唇に防がれ出てこなく、代わりに互いに舌を絡ませあう。

「んっ……ちゅっ、んっ……!」

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅと膣内を蹂躪する事を示す音は強まって行き、陰茎を受け入れた膣口は濡れきって、愛液の飛沫が出るほどとなっている。

けれども互いに唇を離さない、そのまま陽炎の足が提督の腰に絡みつき、提督もまた、体重を挿入する時押し込む力に加える体位となる。

互いに腰を絡ませ合い、抽挿し合い、そしてとうとう、提督が膣奥、子宮口の部分まで陰茎を押しこみ、そして射精を行った。

「んっ!」

唇を塞がれた陽炎が、なにをやられたかを認識し、絶頂する。

射精は断続的に続き、その間も互いに唇を絡め合い、そして唇を離し、陰茎も引き抜く。

「はあ……はあ……はあっ……司令の、モノにされちゃった……」

息を吐きながら、陽炎は膣口から大量の精液が溢れ出てる事を認識する。

提督もまた、彼女を所有物にした感覚に、胸を高鳴らせ、そして彼女を抱きしめる。

「あっ……」

抱きしめられ、嬉しさを感じる陽炎。

提督は、答はこれでいいかと問い掛ける。

「うん……ありがと、司令」

陽炎は微笑む、自分を女として必要としてくれた事に、こんな体になっても、愛してくれる人が居た事に幸せを感じながら。

5

「で、あんたはきっちり上手くいったのね？」

翌日の執務室、昼休みに、叢雲は提督に問い掛ける。

「何のことかな？」

「陽炎の事よ、あんたの事だから奥手になってると思ったけど、大丈夫？」

叢雲は嫌味のように言うが、それは彼女の癖で、本当に心配しているの言葉だ。

「昨日抱いたよ、以上」

提督も中途半端にぼかしても意味はないと考え、旧友に素直に告げる。

「そう、なら問題ないわね……大切にしないよ、ちゃんと、アンタがあの子を大切にしてやらないと……何でもないわ」

「大切にするよ、陽炎も、仲間全員も」

提督は笑顔を浮かべ、叢雲に答える。

陽炎だけを大切にするわけではない、損害を最小限に抑え、戦うのが提督の義務だと、提督は考えていた。

「アンタらしいわね、全く……」

叢雲は呆れたような物言いで、けどもまんざらでもない様子で、窓から空を見る。

青い空、雲一つない空、叢雲の好きな空が、そこにはあった。